松山の魅力アップすすむ

～松山城魅力アップイベント・道後温泉の新温泉施設～

愛媛県
松山市

2017年をシンボルイヤーに掲げた愛媛県松山市では、2015年度松山城の魅力創出事業が成功。道後温泉に新しい温泉施設がオープンすることも発表した。さらに法隆寺がある奈良県斑鳩町とも観光・文化交流都市協定を締結。松山おもてなし大使もAKB48のメンバーから新しく3人を任命した。

松山城にひろしまドリミネーションのイルミネーションやオブジェが登場

松山城のおもてなしイベント
前年の入場者数を大幅に越え

華のおもてなしin松山城

歴史的建築物にいけるシリーズ「華道家　假屋崎省吾の世界　―華のおもてなしin松山城―」が昨年12月8日から12月25日まで松山城天守と本丸広場（愛媛県松山市）で開催された。冬場の観光需要の喚起が目的。国の重要文化財である松山城に、華道家である假屋崎省吾氏による愛媛県産の生花や砥部焼を使った作品が展示され、来場者も約3万人と成功を治めた。本丸広場には竹約100本で作られた巨大なオブジェを設置。天守内では、愛媛県らしい柑橘類を使った作品などが並んだ。

同イベントの特徴は、松山城天守観覧券（510円）のみで鑑賞でき、別途入場料が不要なところ。期間中の松山城天守への入場者数が増えたことで、入場料の収入が増加。いわゆる持ち出しの企画展の開催ではなく、利益をもたらしたほか、観光客や松山市民へのサービスが向上した。またこのイベントの運営法や仕組みは松山市の観光施策のノウハウとして蓄積されることにもなった。

光のおもてなしin松山城

「光のおもてなしin松山城」が7月18日～8月9日まで松山城本丸広場などで開催された。「光のおもてなしin松山城」は松山まつりの第50回開催と、松山城ロープウェイ運行60年を記念して行われたライトアップイベント。主催は松山市、松山城指定管理者の伊予鉄道。広島市とひろしまライトアップ事業実行委員会が協力。瀬戸内・松山構想で連携が強化された広島市の協力で、広島の冬を彩る一大イベント「ひろしまドリミネーション」で使用するものを一部借り受けることができた。イルミネーションやオブジェは東雲神社から東雲口登城道、松山城本丸広場までの間でライトアップ。松山城の登城道や石垣を光の散歩道として演出した。「ひろしまドリミネーション」の「光のトンネル」や「花畑」「フェニックス」などが展示された。日替わりで色が変わる松山城天守のライトアップも行われた。普段は見られない光で装飾された東雲口登城道や松山城本丸広場には、多くの観光客や松山市民が訪れ、記念撮影などを楽しんだ。

また松山城からの市内中心部の夜景を楽しむ人も多く見られた。イルミネーションの点灯時間は18時30分から21時30分。7月18日、19日、20日、8月2日、7日には、松山城のロープウェイが営業時間を延長して無料の夜間運行を行った。

期間中は、約2万3千人が来場した。

光のおもてなしin松山城は
ひろしまドリミネーションと連携

松山城からの夜景

光のオブジェ

松山城に假屋崎氏による愛媛県産の生花や砥部焼を使った作品が展示

假屋崎氏のパフォーマンス

道後温泉に新しい温泉施設オープン

新しい温泉施設のイメージ

道後温泉の椿の湯に隣接して、約30年振りに新しい温泉施設がオープンする。

新しい温泉施設は2017年の国内観光の注目の大型トピックスだ。

道後温泉の泉質の良さや、日本最古と言われる歴史の魅力、文化を伝える。施設名は未定。

市民の湯である椿の湯に併設されるが、多くの観光客が来訪の際に抱いている道後温泉の魅力を損なうことなく、本館との相乗効果が期待できる施設づくりを目指す。コンセプトは「日本最古といわれる温泉にふさわしい飛鳥時代をイメージした湯屋」。

飛鳥時代の建築様式
日本最古の湯を再現

道後温泉本館が明治時代を代表する近代和風建築の温泉建物なのに対し新たな施設は飛鳥時代をイメージした湯屋を再現した建物となる。道後湯之町初代町長の伊佐庭如矢の精神「どうせやるなら、他所が真似出来ないものを作ろう！」を引き継ぐ。

飛鳥時代の建築様式を採用

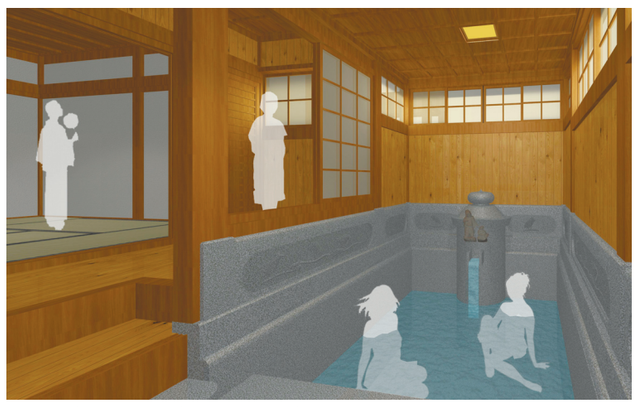
新施設は、外観コンセプトに、596年聖徳太子来湯の伝説がある飛鳥時代の建築様式を取り入れた特徴的なもの。屋根の上には、道後温泉のシンボルである塔屋と、一対の鴟尾を配置。複数の建物を回廊で囲む伽藍配置など、日本最古の湯をイメージした空間で、日本一のおもてなしの提供を目指す。明治時代の近代和風建築の代表である道後温泉本館と対比させ、二つの時代のお風呂が楽しめる話題性に富んだ道後温泉として、国内外へのPRを行っていく。

建物は、地下1階地上2階建て、延べ床面積は約1600㎡で、道後温泉本館とほぼ同規模となる。構造は耐火性のある鉄筋コンクリート造で、歴史のある菊間瓦や大島石、砥部焼といった地域性豊かな資材を採用するなど地縁性の確かな継承も目指す。

建物内では、浴場は、道後温泉の象徴である無加温無加水の源泉かけ流しで、男性50人、女性50人合わせて、定員100人が入れる開放的な大浴場と、新たに露天風呂や皇室専用浴室の又新殿を再現した話題性のあるお風呂を設ける。

2階には観光客に人気の給茶サービスがある大広間と特徴的な個室の休憩室を設けるなど、道後温泉ならではのおもてなしの心が感じ取れる施設とする。

さらに、現在の椿の湯と新しい施設を回廊でつなぎ、その中央に整備する中庭は、湯上がり後の休憩場所や、地域の祭りやイベントを開催するなど、温泉街をそぞろ歩きする観光客にとって新たな集客拠点を目指す。


又新殿（ゆうしんでん）を再現し入浴も可能に

女子露天風呂のイメージ

AKBのテレビ番組企画とコラボ
新しい松山おもてなし大使任命

新しい松山おもてなし大使にAKB48の3人を任命

松山市は3月5日に新たな「松山おもてなし大使」として人気アイドルグループのAKB48メンバーの大森美優さん、小笠原茉由さん、向井地美音さんの3人を任命した。

松山おもてなし大使の誕生は、松山市が2013年に「AKB観光大使」の放送第1回のロケ地となったことがきっかけ。ロケを担当したAKB48メンバーの菊地あやかさんと名取稚菜さんを大使に任命し、2人は松山市の観光パンフレットやPR動画などに登場するなど様々な活動を行ってきたが、2人が同グループを卒業したため、新たな「松山おもてなし大使」として3人が選ばれた。

新たな松山おもてなし大使は、スマートフォン向け放送サービスNOTTVのバラエティ番組「AKB48のあんた、誰？」とCS放送フジテレビONEの番組「AKB観光大使」のコラボレーションした番組内で決定した。予選となったバラエティ番組「AKB48のあんた、誰？」は昨年10月に放送済み。本選となった今回のロケの模様は、3月17日にCS放送フジテレビONEの「AKB観光大使」で放送された。

3月5日に、大森さん、小笠原さん、向井地さんが「AKB観光大使」のロケで、松山城や石手寺、道後温泉などをめぐり、謎解きに挑戦。松山市内の人気観光地や温泉、グルメなどの体験レポートも行った。

大森美優さんは、元読売巨人軍の選手である大森剛氏の長女。松山市は野球ゆかりの地としても有名で、野球を題材とした短歌、俳句を数多く詠み「野球（のぼる）」の雅号も使った正岡子規は野球の普及に尽力したことから、野球殿堂博物館に殿堂入りしている。市内には、坊っちゃんスタジアムや松山市野球歴史資料館「の・ボールミュージアム」もあり、大森さんには、野球関連のイベントでの活躍も期待。

小笠原茉由さんは、AKB48の姉妹グループのNMB48からAKB48に移籍。大阪の難波を拠点に活動していたこともあり、小笠原さんの知名度が高い関西地区からの集客も期待できる。

向井地美音さんは、3人の中で一番後輩となるが子役時代に人気ドラマに出演しているほか、AKB48の中でも次世代のエース候補として期待されている逸材。

新たな「松山おもてなし大使」3人の活躍に注目が集まる。

法隆寺にて斑鳩町と観光・文化交流都市協定

2009年から2011年まで足掛け3年に亘ってNHKで放送されたテレビドラマスペシャル「坂の上の雲」のゆかりの地として、また、2010年の観光俳句ポストの設置をきっかけに交流を深めてきた、松山市と斑鳩町が、日本初の世界遺産である法隆寺にて、法隆寺の大野管長と中宮寺の日野西門跡の立会いのもと、2017年の正岡子規生誕150年、2021年聖徳太子1400年御遠忌に向けて、観光振興や文化交流の協定を結んだ。協定は2022年3月まで。

松山市と斑鳩町は、歴史的にゆかりが深く、法隆寺を創建した聖徳太子は、596年に松山市の道後温泉を訪れたという記録が風土記に残っており、法隆寺境内の大宝蔵院でも紹介されているほど。

また、松山市出身の俳人、正岡子規は人生最後の旅で法隆寺を訪れ、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という代表句を残し、その句碑は法隆寺境内に建てられている。

式典の最後には、今回の協定の記念として、松山市の市花で、法隆寺では長寿の象徴として大切にされている「椿」の苗木が贈呈され、両市町の末永い交流を誓った。

聖徳太子と正岡子規が繋ぐ縁

法隆寺境内の五重塔

問い合わせ先
松山市産業経済部観光・国際交流課
〒790-8571　愛媛県松山市二番町四丁目7－2
TEL：089－948－6558　FAX：089－943－9001
http://www.city.matsuyama.ehime.jp/kanko/

新温泉施設と松山城に注目

松山市の観光戦略を聞く　野志克仁・松山市長インタビュー ～

野志 克仁 氏
松山市長

2017年をシンボルイヤーに設定した松山市の観光施策について、昨年度に引き続き野志克仁・松山市長にプレイヤーとなる2016年度の松山市の観光行政・観光施策について聞いた。

聖徳太子ゆかりの温泉施設誕生
松山城で季節イベント連続開催

――新しい温泉施設に注目が集まっている

野志　道後温泉は、大手旅行会社が行った「ココロ潤う。おんな一人旅に人気の温泉地ランキング」で2年連続、第1位を獲得するなど、全国でも高い評価を受けており、昨年の道後温泉の宿泊者数は、過去15年間で最高を記録している。

新しい温泉施設（仮称）「椿の湯別館」の特徴、魅力になると考えているのは、何と言っても「加温も加水も無い、誇れる泉質の『源泉かけ流し』」。加えて、道後温泉には聖徳太子の来湯伝説もあり、日本最古と言われる道後温泉の強みを活かすために、地元まちづくり団体の提案を取り入れ、飛鳥時代をイメージした湯屋を再現した。

外観は、596年聖徳太子来湯の伝説がある飛鳥時代の建築様式を取り入れた特徴的なもの。屋根の上には、道後温泉のシンボルである塔屋と、一対の鴟尾を配置。複数の建物を回廊で囲む伽藍配置など、日本最古の湯をイメージした空間で、明治時代の近代和風建築の代表である道後温泉本館と対比させ、二つの時代のお風呂が楽しめる話題性に富んだ道後温泉として、国内外へのPRを行っていく。

――施設の規模は

野志　新しい温泉施設の全体敷地は約3100㎡で本館の約2・5倍、地下1階、地上2階建ての木造風鉄筋コンクリート造、延床面積は約1600㎡で本館とほぼ同規模となる。

――浴室、浴槽も特徴的と聞く

野志　その通り、特徴的で、魅力ある3種類のお風呂を設置する。

まず男性側50人、女性側50人、合わせて、定員100人が入れる開放的な大浴場を設置する。

次に道後温泉本館には無い露天風呂を設置する。

最後に最大の目玉といえる皇室専用浴室の又新殿（ゆうしんでん）を再現したお風呂を設置する。又新殿は、道後温泉本館内にあり、見学のみの施設だが、こちらは実際に入浴できると共に、湯帳を着ての入浴も可能である。

――おもてなしも充実させる

野志　四国八十八ケ所霊場がある四国にはお遍路さんへの接待、おもてなし文化が根付いている。道後温泉本館の休憩室でのおもてなしも道後温泉本館の魅力だ。この観光客に人気の休憩室を新しい温泉施設にも設けることにした。道後温泉ならではのおもてなしの心が感じ取れる給茶サービスを大広間と5つの個室の休憩室で行う。大広間は約60畳で、道後温泉本館の神の湯2階休憩室と同規模となる。

また現在の椿の湯と新しい施設を回廊でつなぎ、その中央に約420㎡の中庭を整備する。

湯上がり後の休憩場所としてや、地域の祭りやイベントを開催していく。

2017年内の完成を目指す。

――魅力アップを掲げた松山城は2015年度中に成果と実績を残した

野志　松山城の魅力アップには集客イベントの実施が効果的であることが分かった。今後も春夏秋冬それぞれの季節ごとに魅力あるイベントを展開していく。

春のお城まつりでは、従来の催しに加え、東京ディズニーシー15周年スペシャルパレードを招聘するほか、夏には、昨年、好評を得た「光のおもてなしイン松山城」の継続実施と期間延長を行い、土曜夜市や松山まつりなどとの相乗効果を生み出していきたい。

また、11月には、ゆるキャラグランプリが開催され、松山城に注目が集まるので、秋冬には、学生や若い世代の参画を促しながら、恋人の聖地・二之丸史跡庭園を含め、幅広い層にお越しいただけるよう、魅力あるイベントを実施し、さらなる賑わいを創出していきたい。

――連携などの事業は

野志　まず松山城の城郭建築の歴史的価値や夜景も含めた眺望の素晴らしさを共有、広く発信すること考えている。

風雪に耐えながら、徳川幕府の一国一城令、明治政府の廃城令や戦災など、様々な危機を乗り越え、奇跡的にその姿を今に伝える天守が現存12天守と呼ばれている。

天守が現存している街には、その城と共に残った貴重な文化があり、城下町を活性化させるために生み出された知恵や工夫もあり、現存12天守が果たしている役割は大きいものがある。

連携先として、現存12天守の中でも、世界遺産の姫路城にお願いした。

天守防衛の究極の姿と言われている連立式天守など、城の魅力を国内外にPRする協同ポスターを制作した。なお、両城ともこのように他の城と連携したポスターを制作するのは初めて。

――新しい取り組みは

野志　松山城が鉄壁の防御を誇り、難攻不落と言われていることに着目した。数々の仕掛けを攻略しながら城を攻めるということをテーマにパンフレットを制作。修学旅行生向けの特別体験メニューなどに組み込んだ。

評価が高い天守からの眺望と、全国的にも貴重な登り石垣や屏風折れ石垣をPRするために、既存のパンフレットやホームページを見直すなど、積極的に松山城の魅力とPR活動を展開していく。

――2017年4月～6月は四国デスティネーションキャンペーン（四国DC）が実施される

野志　2017年春に14年ぶりとなる四国DCの決定という朗報が昨年もたらされた。

2017年は、松山市にとっては、その他にも夏目漱石・正岡子規生誕150年や、えひめ国体の開催、そして、道後に新たな温泉施設の誕生など、四国の中でも特に、旅行市場の話題を集め、多くの観光客が訪れることが予想されている。まさにチャンスの年だ。

しかし、何もしないで見ているだけでは、この記念すべき年も、ただ通り過ぎて行くだけ。しっかりとした準備と戦略的な取り組みが必要。

今年の7月～9月に「サイクリンとクルーズ」をテーマにJR西日本による瀬戸内キャンペーンが予定されている。

まず、ここでしっかりと松山市関連のクルーズ商品に磨きをかけたい。

ただ、松山地域だけという商品では瀬戸内海の魅力は伝わらないと考えている。

瀬戸内・松山エリアには瀬戸内海唯一のレストランシップ「銀河」とお勧めの観光列車で第1位を獲得した「伊予灘ものがたり」がある。定期航路でこれらを結び「クルーズと観光列車」が一緒に楽しめ、さらに宮島や広島、道後温泉が楽しめる、瀬戸内・松山エリアでしかできない、これまでにない旅を市場に提案していきたい。

次に秋からの四国DCプレキャンペーンでは、松山の新たな魅力、特に松山城そして城下の魅力にみがきをかけてきたい。

また、四国DCのみを見据えた取り組みでは、その効果が一過性に終わる。

昨年の5月に、JR四国と協定期間を四国DC終了後も見据えた4年間とした新たな協定を締結した。今後も連携しながら、キャンペーン後もルートや商品が定着するような試みを継続的におこなっていきたい。

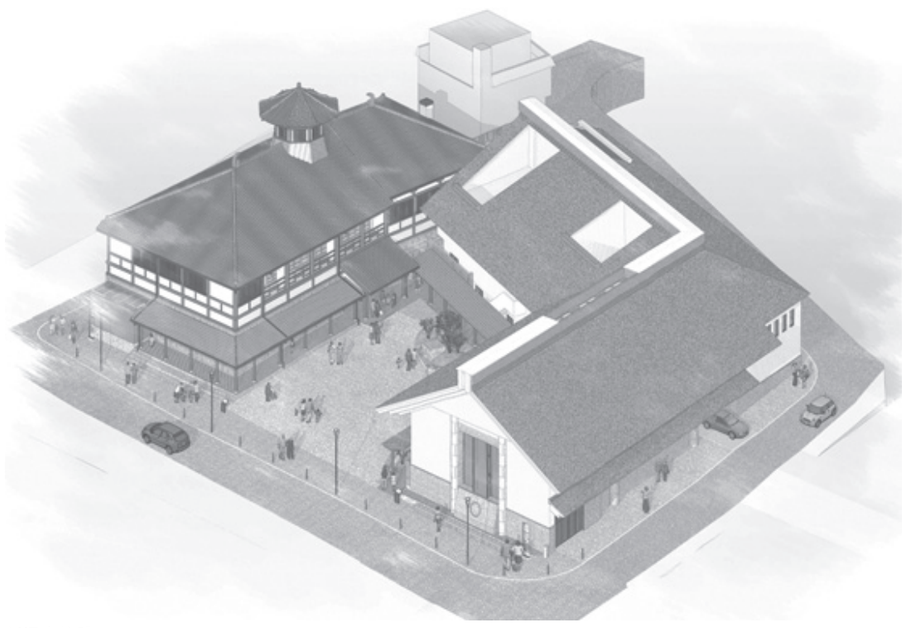
――瀬戸内・松山としては、インバウンドも注目だ

野志　四国DCに向け、全国各地の駅や構内のスペースで「四国」がPRされる。外国人観光客の目にもとまるはずで、外国人観光客に四国をPRし、今後の誘客につなげる絶好のチャンスと捉えたい。外国人観光客の四国全体の延べ宿泊数は1パーセントに満たず、その効果は都市部など一部の地域に限られている。四国を代表する観光都市としてインバウドにも積極的に取り組みたい。

松山市は、昨年、国が認定した7つの広域観光周遊ルートの中で2つのルートで広域観光拠点地区に認定された。

その定着に向け、広域かつ中長期的な視点に立ち、国の施策や、年間100万人の外国人で賑わう広島地域の取り組み、あるいは、交通機関や旅行会社の戦略と連携しながら、関西（大阪・京都）の先に広島が、そしてさらにその先に松山が繋がっているという観光客の流れをさらに加速させたい。

そして、広域観光周遊ルート「せとうち海の道」を共に構成するしまなみ海道や岡山・高松エリアさらに、九州エリアとの連携も強化し「瀬戸内全体の交流人口の拡大」を実現したい。

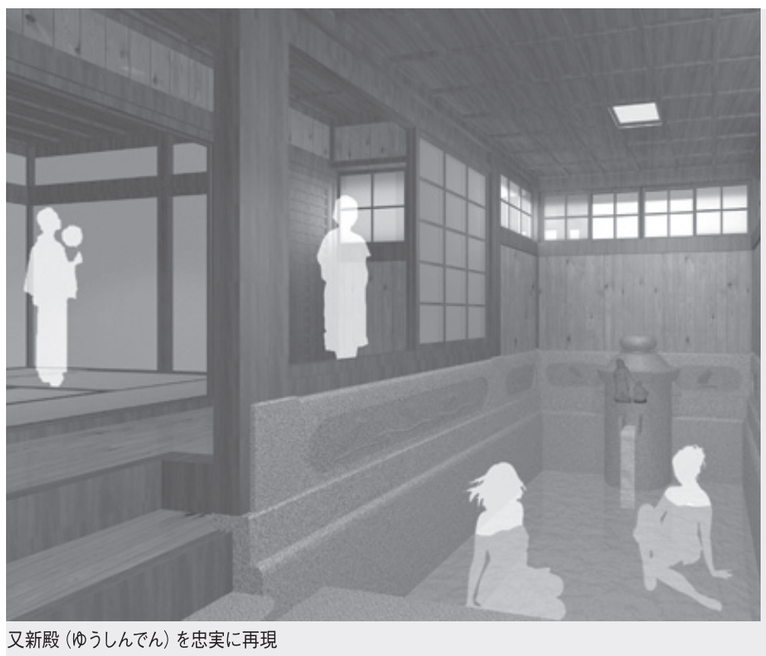


新温泉施設（仮称）椿の湯別館

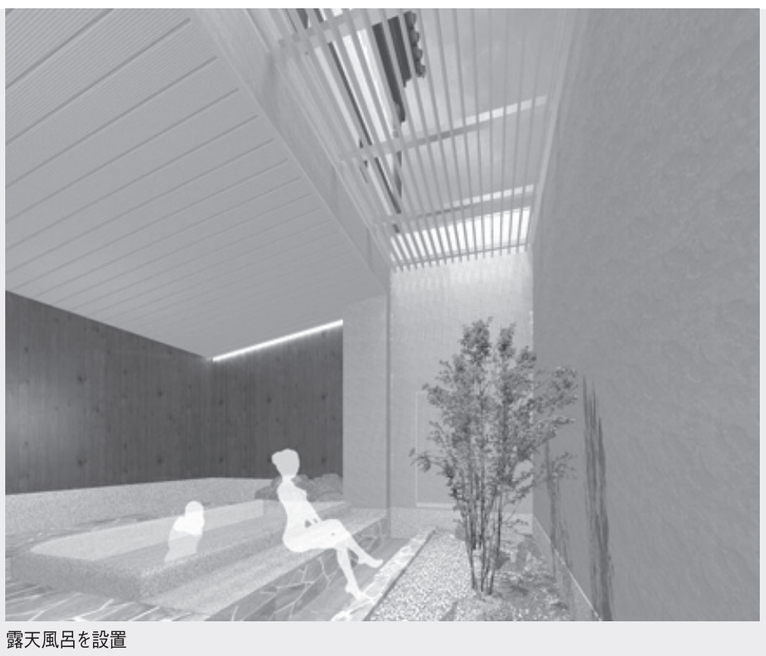
松山城からの眺望（夜景）

JR四国との協定を延長し再締結

新温泉施設のイメージ



又新殿（ゆうしんでん）を忠実に再現



露天風呂を設置

約60畳の大広間

2017年に向けて魅力アップ

～ 新温泉施設・松山城・四国ＤＣ・修学旅行・斑鳩町との協定

修学旅行の受入63校約1万人に
法隆寺で斑鳩町と協定締結

――松山市の修学旅行の取り組みは全国的に注目を集めている

野志　修学旅行は、平日や閑散期に実施され、宿泊を伴う大型団体旅行であり、修学旅行の実施前には、旅行会社や教職員による下見や実踏研修も行われることから、それらを合わせた直接的な経済効果は、大きいものがある。

中長期的視点から見ると、修学旅行生による周囲への口コミをはじめ、卒業旅行や家族旅行など、修学旅行生自身のリピートにより将来へ向けた観光客の増加が期待される。また、立山・黒部などがそうであるように、修学旅行で採用されたルートは新たな旅のルートを創造することが期待され、松山市が進める瀬戸内周遊ルートの定着へも大きな役割を果たしていくものと考えている。

――松山市の修学旅行の状況は

野志　松山市では地域別に修学旅行先の検討状況を把握し、重点的にアプローチする地域を見極めたうえで、多様化する学校の個別ニーズを捉えながら、全行程を通したモデルコースや独自に開発した体験メニューを提案するなど、積極的に取り組んできた。そして、修学旅行生が訪れたときには、地域が一体となって丁寧に受け入れてきた結果、学校や旅行会社から高い評価をいただいている。

その成果は、年間63校、約1万人の修学旅行生にお越しいただいていることや、旅行業界紙で「今、最も注目される旅行先」として掲載、ある学校の修学旅行実施後の生徒アンケートで満足度98・9％獲得などに表れている。

――修学旅行で新しい取り組みをスタートさせる

野志　全国初の取り組みとして「瀬戸内・松山観光アンバサダー」制度を創設した。

「瀬戸内・松山観光アンバサダー」制度は、県外から松山に訪れた修学旅行生をアンバサダー（大使）に任命するもので、中高校生の持つ高い情報発信力を活かし、口コミやSNSなどで修学旅行の思い出や松山の観光資源の魅力、瀬戸内を周遊する旅の素晴らしさを広く発信してもらうことを期待している。アンバサダー（大使）には就任記念証を発行。任命期間は20年で、道後温泉本館や松山城などの市有施設の料金が本人に限り無料となる特典が付く。修学旅行後に、家族旅行や卒業旅行などで再び松山にお越しいただきたい。

――研修面では

野志　松山での班別研修の増加や学校や旅行会社からの要望に応えて、「瀬戸内・松山修学はいく」を作製した。

班別研修で活用いただける冊子として、市内中心部が一目で分かるコンパクト地図や、ぜひ行っておきたい観光施設（松山城、道後温泉、坂の上の雲ミュージアム）の情報、2017年に生誕150年を迎える正岡子規や夏目漱石の足跡などを巡る散策コース、松山への修学旅行を実際に体験された方の声、ユニークなものとしては、市内電車を使って名物名所を巡るスゴロクなどを掲載。電子データはHPにも掲載しているので、学校のしおりの一部として利用してもらうことも可能。

――広島市との連携は

野志　年間約30万人の修学旅行生が訪れる広島市は、広島・瀬戸内海・松山というルートを中心に誘致を進める松山市にとって、重要な連携。これまで、本市の誘致戦略や体験メニュー、あるいは、ゼロからスタートし、60校を超える誘致に結びつけた経緯を定期的に説明に出向くなど本格的な連携を働き掛けてきた。

そうしたなかで、特に、愛知県から広島への修学旅行生が急増した背景に、松山市の取り組みがあることや、多様な体験メニューなどを高く評価していただき、昨年7月には、愛知県で新規校の誘致を目指した説明会を合同で開催し、その模様は、県域を越えた先進的な取り組みとして、広島エリアでは、テレビの特別番組が組まれるほどの反響があった。3月には学校への合同セールスを実施し、現在、広島での平和学習や世界遺産学習、瀬戸内海の船旅、松山での多様な体験をまとめた合同プロモーションビデオも作製中。

――松山の修学旅行の今後の取り組みや課題は

野志　嬉しいことではあるが、実施校の増加により広島―松山間のチャーター船の予約が重複する状況となっている。

定番となった広島―松山ルートに続く新ルートとして、先に松山に入り広島に渡る逆ルート、定番ルートに時間差を設けて午後から松山に入るルート、定期船やフェリーを利用するルート、陸路でしまなみ海道を経由し松山に入るルートなど、重複しても松山までお越しいただける複数のルートを提案していきたい。

――松山市内の体験メニューはどうか

野志　今後のトピックスなどを踏まえながら新メニューを充実させたい。例えば、「2017年に生誕150年を迎える子規・漱石関連のメニュー」「城郭建築の最高傑作『松山城』を攻略するメニュー」など松山ならではのメニューを予定している。

併せて、受入体制の充実も図っていきたい。実施校の増加に伴い、受入先（しまなみ、砥部、大洲、中島など）との連携が重要となってくる。地域が一体となったサポートや新たな体験メニューの共同開発などを進める。

――奈良県斑鳩町との協定が締結できた

野志　俳句ポストの設置やNHKスペシャルドラマを縁に、交流を重ね、世界文化遺産である法隆寺において、法隆寺の大野管長さん、中宮寺の日野西ご門跡さんにお立ち会いいただき、協定締結できたことを心より嬉しく思っている。

松山市に生まれ、近代俳句の礎を築いた正岡子規は、松山から東京の根岸に向かう旅の途中で、奈良に立ち寄り、法隆寺の境内にて、『柿くへば　鐘が鳴るなり　法隆寺』という代表句を残した。この旅が事実上、子規の最後の旅になったというのも、感慨深いものがある。この子規の代表句が誕生してから約120年になり、法隆寺には句碑があり、この句が斑鳩町のマスコットキャラクターのモデルになるなど、斑鳩は、本当に正岡子規を大切にしてもらっている。

国の礎を築いた聖徳太子は、596年に道後へ立ち寄った際、椿が咲き誇る明媚な風光と良質の温泉を寿の国、「寿国」と賞賛し、その縁で、松山市の花は椿、道後温泉本館の近くにある別館は「椿の湯」といい、聖徳太子の碑文を刻んだ石碑も置かれている。

5年前の俳句ポスト設置以来、様々な分野で交流を続けてきた。今では、小城町長に毎年、「えひめ・まつやま産業まつり」に参加してもらえるようになった。イベント交流、あるいは、修学旅行、団体旅行の誘致へ向けた相互支援など協力関係が着実に築かれている。

――これまでの連携の実績は

野志　観光・文化交流では、俳句ポストを法隆寺iセンター、JR法隆寺駅観光案内所、いかるがホールに設置、「子規・斑鳩の里俳句大賞」に参加、松山市からは「聖徳太子市（旧：斑鳩市）」に、斑鳩町からは「えひめ・まつやま産業まつり」に相互出展している。

誘客や送客の面では、修学旅行の誘致に成功。2012年に斑鳩町の高校を受け入れることができた。その誘致がきっかけとなり周辺地域からの誘致にも繋がっている。団体ツアーも小城町長自らが松山への送客を応援してくれた。斑鳩町をはじめ奈良県からも送客いただき非常に感謝している。

――今後の斑鳩町との連携は

野志　2017年は正岡子規の生誕150年、そして、2021年は聖徳太子の1400年の御遠忌と、大きな節目の年を迎える。さらに、松山市では、2017年に、えひめ国体の開催、太子が訪れた頃に思いを馳せる、新しい温泉施設の建設も予定している。このたびの協定締結は、まるで聖徳太子、正岡子規の2人から授かったメッセージのようだ。

これまで築いてきた関係をベースに、記念の年に向けた新たな取り組みを協力・連携して実施していきたい。

――他の協定については

野志　2017年は、夏目漱石生誕150年でもあり、昨年7月には、漱石の生誕・終焉の地である新宿区と「夏目漱石をゆかりとした歴史・文化及び観光交流に関する協定」を締結した。常々、一つの地域だけ、行政だけの力では、将来へ向けた伸びしろは限られると考えている。松山市が結んだ協定ではあるが、松山市と協定先だけの連携に留まるのではなく、協定先同士も連携した事業展開を図っていきたい。そうした連携が今後さらなる協定先との交流促進に繋がり、協定先と連携した取り組みは全国を動かす原動力になると期待している。

松山市の修学旅行の様子（道後温泉本館前）

広島との連携（宮島）

法隆寺にて斑鳩町と協定を締結

「瀬戸内・松山観光アンバサダー」の就任記念証

姫路城と松山城を共同でPRするポスター

協定締結を記念して椿の苗木を贈呈

法隆寺境内にある子規の句碑

松山市の観光戦略と成果

交通事業者や大手旅行会社への積極的なトップセールス

・３年間合計８社による集中送客キャンペーンの実施
・広域周遊型きっぷ「松山・広島割引きっぷ」誕生
・修学旅行誘致の増加

広域観光連携

・広域官民連携組織「瀬戸内・松山ツーリズム推進会議」設立
・第1回瀬戸内4県都市長会議
・奈良県斑鳩町と観光・文化交流都市協定を締結

国策との連携

・新ゴールデンルート（京都・広島・松山）誕生
・ミシュラン・グリーンガイド四国ＷＥＢ版開設
・「西遊紀行」プロジェクトのスタート

他業種との連携

・松山商工会議所と「おもてなし日本一のまち宣言
・資生堂と「椿パートナーシップ協定」を締結
・明治村と「明治体感パートナー協定」締結
・AKB48メンバーを「松山おもてなし大使」に任命

今後の瀬戸内・松山のトピックス

２０１６年
・夏目漱石没後１００年
・小説「坊っちゃん」発行１１０年
・原爆ドーム・厳島神社世界文化遺産登録２０周年（広島）
・せとうち観光推進機構設立（瀬戸内広域）
・瀬戸内国際芸術祭（香川・岡山）
・四国ＤＣプレキャンペーン（四国）

２０１７年
・正岡子規・夏目漱石生誕１５０年
・坂の上の雲ミュージアム開館１０年
・四国デスティネーションキャンペーン（四国）
・第２０回俳句甲子園
・えひめ国体開催
・新温泉施設オープン

２０１８年
・明治維１５０年
・秋山真之生誕１５０年

第1回瀬戸内4県都市長会議

銀河船内での瀬戸内イベント

子規記念博物館

道後温泉「椿の湯」